

## 2018年メキシコ大統領選挙

高瀬 寧

6年に一度、かつ、メキシコにとって大きな転換点ともなり得る2018年の大統領選挙に立ち会った者として、私の見聞きし、感じたところの一端を皆様と共有させていただきたい。

(大統領選挙の分析、選挙を踏まえた今後の展望等については、本誌「ラテンアメリカ時事解説」の在メキシコ大使館大沼書記官の寄稿をご覧ください。)

## 日本大使の限界

ただし、私の見聞きしたところなど、この大国メキシコで起きていることのごくごく一部にしか過ぎない。このことは今回の大統領選挙を通じて一番強く感じたことの一つである。大統領選挙では、ロペス・オブラドール候補が選挙戦当初から世論調査でトップを走り、結局7月1日の選挙でも、3,000万票を超える票と50%を超える得票率を得て歴史的な圧勝を収める。しかし、私が選挙戦中にメキシコ・シティーで話を伺ったメキシコ人の中で、自信を持ってロペス・オブラドール候補に投票すると言った人は、ロペス・オブラドール候補の選挙チーム・メンバーを除いては、皆無だった。私が話をした多くの人は、少なくとも選挙戦の中盤くらいまで、ロペス・オブラドール氏の勝利を信じていなかった。曰く、「過去2回の選挙でもロペス・オブラドール候補に対する危機感が、彼の勝利

を阻止した」、「候補者討論会で流れが変わるだろう」、さらには「最近の世論調査はあてにならない」等々。どこにロペス・オブラドール氏を支持した3,000万人ものメキシコ人がいたのかと思ったほどである。自分の知っているメキシコがこの大国のごく一部でしかないということ強く感じた次第である。選挙が終わった今でも、私の周りには、ロペス・オブラドール氏率いる次期政権に批判的、悲観的な意見を言う人が多い。そうなのかもしれないと思う反面、ここは一步下がって本当にそうなのかよく見極める必要があると感じている。



選挙後のパズル(メキシコの地図がぐしゃぐしゃ)  
© Periódico Reforma

## 制度的革命党 (PRI) の歴史的役割

ロペス・オブラドール氏と

その政党である国家再生運動 (MORENA) の圧倒的な勝利の対極にあるのが、制度的革命党 (PRI) の大敗である。「革命」が「社会組織を急激に変革すること」であれば、「制度的革命」というのは自家撞着とも思われるが、その意味するところは、メキシコ革命の成果である1917年憲法の目標を制度として実施していくことであつた。ラサロ・カルデナス大統領の時代には農地改革が大きく進められるとともに、石油産業の国有化が行われ、メキシコ革命の理念が推し進められたと言われている。(ロペス・オブラドール氏は尊敬する大統領として、建国の父ベニート・フアレスやメキシコ革命のフランシスコ・マデロと並んでラサロ・カルデナスをあげている。)

しかし、1980年代になると債務危機等をへてメキシコはPRI政権の下で市場主義、自由主義の政策を推し進めていくことになる。1992年の憲法修正で農地改革の基軸であった共有地 (エヒード) 制の解体と外資規制の緩和等が行われた結果、「メキシコ革命の理念は完全に失われたと言っても過言ではない」と言われるまでの状況になる(注)。1980年代以降は政治の民主化も進み、2000年にPRIは71年間続いた政権の座を手放すことになる。2012年に政権に返り咲いたPRIのペニャ・ニエト現大統領は果敢に構

造改革を推し進める。そしてメキシコ革命の成果で最後の聖域ともいわれた石油開発の国家独占についても憲法を改正し、外国資本の参入を認めることになったのである。この様に1980年代以降、30年間にわたりPRIは市場経済政策と構造改革を進め国の発展に大きく貢献するとともに、自由で開放的な対外政策を進め、国際社会においてもメキシコは重要な地位を占めるに至った。メキシコ革命から100年以上がたち、メキシコという国自体もそしてまたメキシコのおかれた状況も大きく変わった。今やPRIにも、他の政党にも、単にメキシコ革命の理念に回帰するだけではない、新しい政策の方向性を模索することが求められているのだと思う。

ちなみに、メキシコ革命の重要な成果の一つである大統領の再選禁止条項は今も憲法に残っている。ロベス・オブラドール氏は7月の選挙で、連邦議会上下両院の過半数と全国32州のうち15の州議会での過半数を得た。このように憲法改正の可能性も見えてきた

ロベス・オブラドール氏が大統領の再選を認めるような憲法改正を行うまでに至るか否かはメキシコの将来にとって重要なポイントの一つになると言えよう。

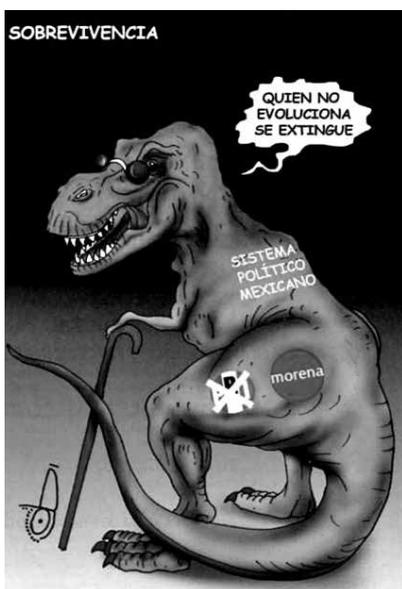
### 民主的選挙

7月1日の選挙は、地方において若干の混乱は生じたものの、全体として平穏理に実施された。メキシコにおいては選挙に対する国民の信頼が極めて低い。特に近年はいくつもの汚職疑惑と相まって、メキシコの民主主義に対する国民の支持率は38%と4割にも満たない。そのような中で公正な選挙を実施し、国民の信頼できる選挙結果を出すために、国家選挙委員会(INE)は涙ぐましいほどの努力を行っている。特に今回の選挙は、大統領選挙のみならず、連邦議会選挙やいくつかの州知事選挙をはじめとする地方選挙が同時に行われ、総計3,400に及ぶ公職ポストが選出されるメガ選挙であった。選挙委員会の苦労も一方ならなかっただろう。選挙戦が始まる前の3月にメキシコ外務省が主催した各国大使館に対する選挙説明会の中で、コルドバ国家選挙委員会委員長は国民の信頼できる選挙を行うことが最重要課題である旨繰り返し述べていた。メキシコでは投票は義務ではないが、投票率は今回の選挙でも63%と比較的高い。これには有権者が投票しやすいよう、有権者の近くに必要なだけ数多くの投票所を設置するよう努めていることも一役買っている。今回の選挙では、投票所の数は全国で155,000を超えた。住民から抽選で選ばれた選挙役員が投票所を管理する。その数、合計で約140万人。各投票所にはそ

れぞれの政党(選挙同盟)を代表する監視役もついている。7月1日には、私も他の大使館員と手分けしていくつかの投票所を視察した。選挙役員も、政党代表監視役も、そして投票する人たちもまじめに、整然と投票を行っていた。同時にみんな近所同士ということもあって、和気あいあいとした雰囲気でもあった。投票が終われば、即日開票。日頃、大使館と付き合いのある某選挙役員は、私の顔を見て、「今日はオベントウを食べながら一日頑張ります」と言っていた。開票発表も、サンプル調査に基づきその日のうちに発表される速報、各投票所の結果を電子的に集計の上翌日発表される予備発表、そして1週間後に発表される最終発表と、透明性と信頼を確保するために入念な手続きが踏まれている。

各候補者の選挙資金には上限が決まっていて、これを5%超えると選挙が無効になる。かなり細かいところまで調査するようだ。他方、どこまでが選挙費用で、どこからが救済事業なのかの見極めは難しい。信頼獲得に向けた選挙委員会の奮闘は続く。また選挙期間中に200人を超える候補者が殺害された。これは選挙云々以前の国としての問題である。

未来に向けた明るい出来事として、日系人候補ペドロ・クマト氏(27歳)の善戦があげられる。ペドロ・クマト氏は昨年秋、外務省の日系人招聘プログラムで訪日し、大喜びでメキシコに帰ってきた。と思っていたら、そのまま連邦上院議員選挙に、どの政党にも所属しない独立候補としてハリスコ州から立候補した。ウィキペディアの向こうを張った「ウィキ



適者生存 © Periódico Reforma

ポリティカ」という考え方で、若い人を中心として、市民参加型の選挙戦を展開した。メキシコ・シティの新聞にもその活躍ぶりが報道されるなど、当選間違いないと思われたが、いま少しのところで議席に届かなかったようである。その後、大使館に来てくれて若干遅めの帰国報告会を開いた。日本での貴重な経験をメキシコにも活かしていきたいと明るく話してくれた。メキシコは若い国で、今回の選挙でも18歳から29歳までの有権者が全体の30%を占めた。メキシコはまだまだ成長していく。



秩序ある政権移行 © Periódico Reforma

## 政権移行

メキシコの大統領は12月1日に就任する。しかし、選挙で圧勝をおさめたロベス・オブラドール次期大統領は、すでに次期政権の閣僚、そして次期政権の政策を次々と発表している。政策面では汚職対策を念頭に置いた緊縮、節約政策が目立つ。例えば、大統領の給料は現行の6割カット、大統領専用機は売却する等々。次期

閣僚に任命された人たちもすでに活動を始めている。しかし、まだ大臣ではないから役所は使えず、事務所は自分で用意する。報酬もない。大学の先生である次期閣僚の一人は、ビジネスマンの次期閣僚からオフィスを貸してもらって助かっていると言っていた。秘書は「次期大臣は毎日午後4時にはオフィスに来ます」と言っていたから、午前中は大学で教えているのかもしれない。これまでに会った次期閣僚の方たちは、皆さん、新しい政権の発足に向けて期待を膨らませているといった面持ちで、すがすがしい印象を受けている。

日本としても、8月17日、河野外相が今年2回目となるメキシコ訪問を実施し、ロベス・オブラドール次期大統領と会談した。会談では、河野大臣からロベス・オブラドール次期大統領に対し、選挙勝利の祝意を述べるとともに、400年以上の歴史をもち、今年外交関係樹立130周年を迎えたメキシコと日本の良好かつ緊密な二国

関係をさらに発展させていきたい旨を伝えた。これに対し、ロベス・オブラドール次期大統領は、日本からメキシコへの長年の投資の重要性に言及しながら、日本との間で様々な面で関係を強化していきたい旨を述べている。私としても、新政権との間で、日メキシコ関係をさらに発展させていくことを楽しみにしている。

(注) 国本伊代編著『現代メキシコを知るための60章』。国本先生は大統領選挙を踏まえて、同書を改訂中と伺っている。

(たかせ やすし 在メキシコ日本国大使)



出口のある道 (投票箱の向こうは明るい)  
© Periódico Reforma